

## インフォメーション

# 国際科学連合会議(ICSU)の能力開発委員会について

大橋 秀雄 (第5部副部長)

開催期間：1995年6月22日～23日

開催地：パリ(フランス)

1993年10月に開かれたICSU(International Council of Scientific Unions)の総会で、Committee on Capacity Building in Science(CCBS)の設置が承認され、フェルミ研究所名誉所長のLeon Lederman博士(米国、1988年ノーベル物理学賞)が委員長に指名された。Capacity Buildingという聞き慣れない言葉は、人間が本来備えている能力を引き出し強化するという意味で、委員長の発案と聞いている。委員会名を直訳すれば、「科学における能力形成委員会」ということになるが、簡単に能力開発委員会と呼ぼう。

第1回委員会は、1994年6月パリのICSU本部で開催された。それまでに委員長は委員の選任を進め、途上国、先進国あわせて10人の委員が招集された。議事録によると、まず最初に委員会の目的が確認されたが、その要旨は以下の通りである。

人類の将来は「科学とその賢明な応用」に依存している。国民及びその指導者たちが科学に対し無知(scientific illiteracy)であれば、南一北、途上国一先進国、貧者一富者の格差は一段と拡大し、地球規模の危機を招来する。本委員会は、科学とそ 互見に基づく技術の発展を促すために、国や地域の特質に応じた効果的なプログラムを発足させることを目的とする。

上記の目的を具体化するため、本委員会の中に次の三つの課題に対応するワーキンググループが設けられた。

- WG 1：初等教育における科学と数学の教育を強化する。
- WG 2：科学技術者の孤立を防ぎ、研究者同志および社会との連携を強める。
- WG 3：科学技術に対する社会の認識と理解を高める。

各委員は、自らの関心に基づいて何れかのWG(複数可)に属し、まず課題ごとに審議を行うことになった。また、この委員会で委員増強の必要性が指摘され、昨年8月、ICSU事務局長から伊藤会長あてに委員推薦の依頼があった。

会長から筆者に委員就任の依頼があったのは、第

15期以来工学の立場から人材育成問題に関与してきたからと思われる。かつてICSUと関わりを持ったことがなく、霧の中に飛び込むような心境であったが、この役をお引き受けし、あわせて第7常置委員会付属のICSU分科会主査に指名された。筆者は、先進国としては一番関心の深いWG3に参加することにした。

本年3月10日、WG3の最初の会合がイギリスのケンブリッジで開催され、出席した。ケンブリッジ最古のカレッジ、Peterhouseが会場で、その学長Sir John Thomasの司会で会議が進められた。オブザーバーを含めて総勢8人の集まりであったが、博物館や放送事業の専門家を含めて社会の科学離れを防ぐための方策が多角的に論じられた。筆者は、日本の科学離れの現状を資料に基づいて説明し、あわせて昨年末に総理大臣名で出された「科学技術系人材の確保に関する基本指針」の内容を紹介した。日本では、総理自らこの問題に関心が深いのかと他国の委員から羨まれ、いささか面はゆい感があった。

本年6月22～23日、パリのICSU本部で第2回の能力開発委員会が開催され、参加した。なお前日の21日には、ICSUを構成する各国際連合のTeaching Commission(教育委員会)の代表が集まり、相互の連携を強める会議を開いている。

委員会には、13名の委員とICSU会長を含めた5人のオブザーバーが参加した。

先進国一途上国、男性一女性、それぞれ役半数ずつで、科学政策を論ずる委員会で女性が半数を占める(中国、インドネシア、インド、ブラジル、アメリカ代表)ことに驚きを禁じ得なかった。会議は、Lederman委員長の軽妙な司会で進められ、ICSU事務局長ジュリアさんの纏めの才能に助けられスムーズに進行した。まず、各WGから審議経過の報告があり、問題点の紹介が行われた。WG1の話題の中で、小学校教員の待遇と質が問題となったとき、中国では、小学校教員は尊敬されていると中国代表から紹介があり、各国から羨望を受けた。そこで筆者は、日本では小学校教員も大学教員も給与はほとんど同じと紹介したら、それで日本躍進の秘密が判ったと妙な納得を得た。WG2も主に途上国の問題で、インターネットを始めとする情報手段の強化によって、僻地に散在する研究者の孤立を防げないかと議論が沸いた。WG3は主として先進国の問題であり、

科学離れ対策が中心である。筆者は短いステートメントを用意し「いま先進国が  
略研究の強化が続くと、科学技術の成果の配分が地球規模のアンバランスが一層拡大する。科学の進歩がもたらす知見を、人類共通の資産として誰もが享受できるメカニズムを強化しないと、科学の進歩は、本委員会の意図する方向とは逆の結果を生むだろう」

と、日頃の危機感を紹介した。この発言は、途上国

この会議の討議結果を受け、ICSU総会に新しいプログラムの提案を行う予定である。新プログラムは、IGBPやIDNDRと同列の重みを持つもので、科学知識の浸透は環境問題などと肩を並べるグローバルな課題として浮上することだろう。